



Title	アイデンティティ
Author(s)	小田, 歩
Citation	GLCOLブックレット. 2013, 11, p. 67-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

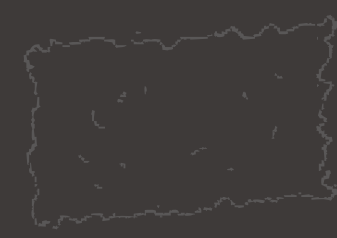
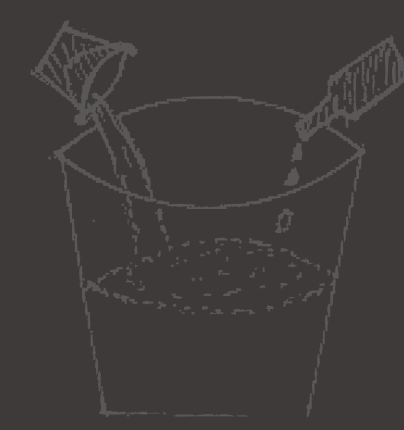
中国共产
党
西双版纳
市嘎洒镇

纳板村



【第1部】

西双版纳



アイデンティティ

小田 歩

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

本稿では、調査地である納板保護区に住む人々のアイデンティティの実態と変容について明らかにする。

1. はじめに

本稿では、西双版纳を対象地とし、近代化に伴って人々のアイデンティティが変化してきたか否かについて考察する。納板保護区の特色は、標高によって育つ植物の種類も異なり、そのことによって各民族の文化も異なるという状況にあることである。中国国内の他の地域では、標高2000mを超えると低温地帯になることから植物があまり育たない、しかし中国の中でも南に位置する雲南省では、豊かな自然環境のおかげで各地に独自の文化が形成されたと考えられる。

中国の少数民族は公式には55民族とされ、主に国境沿いの広大な領域に漢民族と雑居している。1949年、中華人民共和国の設立とともに誕生した民族自治地方(5自治区、30自治州、120自治県・旗)の総面積は、中国国土の64%を占め、陸地国境線のほとんどを民族自治地方が占めている。1949年から1970年代までは、国境周辺ということから、また国防という観点から、国境を跨って居住している少数民族の場合(例えば、傣、ハニなど)も、経済的・文化的交流は、極めて制限されてきた。しかし、1980年代の中国の経済改革政策とともに、民族自治地方は、現在は、中国と隣国との経済的・文化的交流の窓口となっている。新谷(1984)は、自身の著作の題名として『黄金の四角地帯』という表現を用いているが、これは、黄金の三角地帯(タイ・ラオス・ビルマ)に雲南省の一部を加えた文化的・歴史的に共通性を持つ地域圏としての意味で用いられている。

スチュアート・ホール(1998)は、「エスニシティとは、主体性及びアイデンティティの形成における歴史、言語文化の場所を認めるものである」と述べる。中国における民族概念は、中華人民共和国期に入ってから(1953年の第1次人口センサスから1986年の第3次人口センサスの間に)行われた民族識別工作により「創られた」ものである(毛里 1998: p.68)。民族識別工作では、主にスターリンの4原則に従い、中でも各民族の民族意識がとりわけ重視されたと梶丸(2008)は述べている。今日「少数民族」と呼ばれる人々の多くは、かつて「原住民」、「土着民」、「部族民」などと呼ばれ、高度で「自立的な」部族社会を営んでいた。また、中国で通常いうところの民族の意味はかなり広く、自己の特徴を持つ民族はその発展レベルや歴史的段階の如何にかかわらず、習慣上すべて「民族」と呼んでいる。

しかしながら、中国における民族概念は、民族の形成における統一国家の役割を特に重視したものであった(黄 1995)。中国では、全国民に身分証(IDカード)が交付されるが、身分証には明確に「民族」が記入されている。そして、身分証に対して中国少数民族からは何の違和感も表明されない。金(2012)の聞き取りでは、「何民族ですか」と聞けば、必ず身分証明証に記入されている民族名で返答があった。中国少数民族にとって、アイデンティティとは、まず身分証明上の記載であり、彼らが持つ身分証自体は、彼らが抱いているアイデンティティに目覚めていく過程においてある。この身分証は文字通り、スチュアート・ホールが語る「お前は何者か」という政府(支配権力)の問いに答えるために発行されたものといえる。

中国少数民族のアイデンティティについて考える場合、その形成と変容に不可欠な要素として、各民族が置かれている歴史的状況の個別性あるいは特殊性が挙げられる。中村(1993)は、中国少数民族のアイデンティティを、中国への帰属意識によって、「独立指向」「自治要求」「民族帰郷」「事実追認」という、4つのグループに分類している。また李(2007)は中国少数民族を歴史的・地政学的な側面より、「越境民族」「土着民族」「散居民族」という3グループに分類している。

しかし、現実的には中国少数民族の帰属意識はもっと複雑である。民族識別工作によって、中国少数民族であることを認定されてからの長い期間の中で、個人的であれ、「中国」と「少数民

族」という二重アイデンティティあるいは多層アイデンティティが形成されていると考えられる。結局、中国少数民族のアイデンティティとは、鈴木(1993)が言うように、「国家という上からの方向と、現実生活する人々の帰属意識という下からの方向が交錯する局面で、第3カテゴリーとして生み出された」ものである。

ここで、言語について触れておきたい。民族同士を区別する要素のひとつとして、日常的に使用している言葉が挙げられる。言語はそれぞれの民族で独自の発達を遂げているものであり、民族アイデンティティ(民族性)を表す時に考えられる特徴のひとつである。現行の中華人民共和国憲法(1982)の第4条では、各民族の一律平等、民族区域自治の実行や各民族語・文字の使用と発展の自由などを求めている。ここでの「民族の一律平等」とは、少数民族文化の言語、文字、生活習慣、宗教信仰の尊重を意味すると言えよう。

次に、少数民族への教育、特に、中国農村部における教育についての概観を示す。蘇(2011)によると、中国では、農村人口が全国人口の70%を占め、農村の小中学生数は全国の小中学生全体の75%を占めている。農村教育を進展させ、全国民の教育レベルを引き上げ、新世代を育成することが、中国にとって喫緊の課題となっているが、農村の学校は施設や教材などのハード面でも、教員の学歴レベルや待遇などのソフト面でも都市の学校よりずいぶん遅れている。

そのような状況で行われる中国少数民族における言語教育の特徴として、主に、2言語(中国語と民族語)教育が挙げられる。中国少数民族の2言語教育は、またその地域と民族グループによって、①モンゴル民族・朝鮮民族型 ②ウイグル民族・カザフ民族・チベット民族型 ③南方少数民族型の3つに分けられる。①は主に学校教育を通して民族語を保持しつつ、中国語を学習することを目的とする。②は、言語教育＝漢語教育という意識で行われている。この民族グループにとって民族語を喪失することへの懸念はほとんどなく、中国語のできない子供たちにいかに中国語を教えるのが問題とされている。③は、民族語・文字を媒体として第2言語たる看護を学習させることを目的としている。民族語は中国語を学ぶ補助手段であり、民族語の授業は小学校低学年に限られている。

今回調査対象とした納板保護区の小学校では③の南方少数民

族型の教育が行われている。納板保護区内には、小学校が8校あり、生徒が735人、教員が41人在籍している。(2012年11月現在)しかし、中学校と高校は無いため、周辺の鎮(町)か、景洪の学校に通う必要がある。この場合、自宅からの通学は困難となるため、寮に住むことが必要となってくる。このような状況の中で、納板保護区の方々が抱える問題としては識字問題などが挙げられる。実際に現地では字が読めないことによる障壁があるということが聞かれた(写真1)。

以下に、今回対象とした調査地に住む6つの民族を表に表す。なお克木人は民族として承認されていないので、省略する。

次章では、インタビューの中で得られた、民族アイデンティティや自らの文化・言語に対する意識が表れている語りを中心にまとめている。

表1:調査対象民族概要

	言語・ことば	文字	生業	新たな収入源
傣	タイ語	新タイ文字	植物・川魚・エビ採集	ゴム・バナナ
ハニ	ハニ語	—	茶・トウモロコシ	
ラフ	ラフ語	—	狩猟・稲・植物採集	ゴム・バナナ
ブラン		—		
漢		漢字		
回		—		

2. 調査報告

2.1 インタビューから

2.1.1 壮年男性Aのケース

彼は村長として曼呂村(クム人:102人22戸)の代表を務める者であり、今回の調査でも非常に協力的であった。彼は、「土地の

表2:インタビュー対象者

対象者	性別	年齢	職業	村
A	男	40代	村長	曼呂村
B	女	10代	求職中	曼点村
C	男	40代	村長	曼点村
D	女	60代	不明	曼兴良
E	男	10代	学生	曼兴良
F	男	30代	不明	ハニ族村



写真1:漢字と新タイ文字で表記された看板

知識は消滅しつつある」と危惧する発言をしていた。土地に対する愛着について尋ねると、Aは彼の「母の母の母もこの村に住んでいた」そうで、その分土地に対する思い入れは強くなっているように感じられた。また、互いの村は仲良しであり、争いは「全くない」ということで、村に対する愛もあるが、他の村を敵対視するという事はないことが窺い知れる。

そんな中、インタビューが行われている隣の部屋から、ラジオ放送の音が聞こえていた。ラジオについて尋ねると、それは中国語ではなくタイ語で放送されており、聴いていたのは老年女性であった。彼女は中国語が理解できないのでタイ語の放送を聞いているということであった。

この村の家はすべて政府の補助金で建て替えられており、伝統的なスタイルを残しつつもどこか近代的な雰囲気を感じさせる村であった。お金は政府からもらい、建て替えは自ら行ったという。この村の人々は、自身の民族が消滅の危機にあるという感覚は持っていないようで、なぜ政府から補助を受けているのかをあまりわかっていないようであった。政府が支援金を振り分ける際に、保護が必要か不要かを決める基準は恣意的なものであるということだ。この村でも、年配の方は中国語が理解できないため、TVや新聞を見てもわからないという。

2.1.2 若年女性Bのケース

「自らの文化や言語についてあまり詳しくないのは恥ずかしいこと。でも将来のキャリアのためには、他の言語を学びたい」

19歳の彼女は、村長の娘であり、タイに留学していた経験を持つ。仕事をしたい気持ちはあるが、この村では仕事が無いので、タイ語を学ぶために留学を選んだという。留学先はチェンマイ近くのナンバンという地にあるタイ語専門学校であるが、留学先より、自らの生まれ育った村の方が好きであるということだった。その理由は、タイは暑すぎる、料理が甘すぎるということだった。彼女は自らの言語であるラフ語が話せないことについて、少し恥じているようだが、生活や仕事のためには、中国語やタイ語を学ぶことが優先であると言っていた。なぜ留学にタイを選んだのかその理由を尋ねたところ、曼点村の周囲にはタイの開発企業が多数進出しており、そこで働くチャンスを手に入れたいからということであった。「現地の言葉に興味はあるけど、使える範

囲が狭すぎて…」というのが若者の本音なのかと思われた。

言語や文化が失われることに対して危機感を覚えている人は、それらに慣れ親しんだ年齢層の高い人々だけではないということが、これらの発言から予想される。しかし、自らの将来について考えると、少数の人々しか使用しない言語や、またその文化の継承というものが、後回しになりがちという現状もあるようだ。

2.1.3 壮年男性Cのケース

「村に住むすべての人々は、伝統的様式の住居を好んでいるんだ」

彼は上記Bさんの父親である。彼の住む村には、政府から補助金が支給されている。彼らクム人の村は全部で12あり、すべての村が政府からの補助金を受け取っている。しかし、他の11の村は生活様式や家屋の形式などが漢化されており、伝統的な様式を保っているのはこの曼点村ぐらいであるということだ。補助金は住居を立て直すための費用として支給されているが、村人は、なぜこの村が補助の対象に選ばれたのかをあまり理解していないようであった。自らの文化が消えゆくという意識はあまり無いようであった。「この村の人々は漢式の住居は住みにくいと考えており、伝統的なプラン式にしている。そして村人は皆例外なく、このスタイルが気に入っている」という確信を伴ったCの返答は印象的であった。今回他の村を回った後にこの村に訪れて持った印象は「整っている」というものであった。伝統を守りながらも、整備されているという感覚を持った。実際に屋根の様式や、柱の作りなどは伝統的なようであるが、屋内や2階を少し見学させてもらうと、近代的な家屋とほぼ差異はない様子であった。漢化の進む村から来た人々からは、この村の様子が羨ましく思われるという話をしてくださったCさんの顔は忘れられない。伝統を守っていることに誇りを持っているようだ。

また、ひとつ疑問に感じたのは、村長であるCさんの娘Bさんは、民族語の習得を強制されなかったのかどうかということである。文化保存などに力を入れている様子であるにも関わらず、我が娘に対する教育方針はまた別なのかも知れないと思われた。

2.1.4 老年女性Dのケース

「私はここで生まれたから、ここで死にたいよ」

この60歳女性は「この村はすごくいい。ラフが良い。」と言っていた。今回の調査は、各村での滞在時間が短かったためか、インフォーマントと関係性を築く段階まで行かず、それぞれの発言を掘り下げることが比較的難しかったように感じられる。特に、「保護員」¹の同伴の元で調査が進められたので、村人は私たちを恐れていたのではないと思われる場面もいくらかあった(恥じらいなのか恐怖なのかは不明であるが、この女性Dの周囲には就学前の児童も数名群がっていたが、我々が話しかけようと近づくと、速足で散ってしまった)。そのような中でも、できるかぎり互いの緊張を解きほぐすことができるかどうか、インタビュアーの技量にかかっていると感じられた。

ちなみにこの女性はあまり視力がよくないようで、よく見ると白内障であるようだった。標高が高いと太陽光が強いことにより、目にも負担がかかりやすいと考えられる。

2.1.5 若年男性Eのケース

老年女性Dのそばにいた男性にも尋ねたところ、「学校はつまんない! 卒業後は街に行きたい」と話してくれた。彼は現在中学3年生であるが、かれは街の方が村よりも合っているようだ。彼はそこにいた若者集団の中でも比較的年齢が上の方で、他の年齢の低い子供の面倒を見ているようにも見えた。この村では、バスケットボールが盛んなようで、車で到着するや否や、バスケットゴールで活発に遊ぶ子供の姿が目に入った。どこの村の学校にも必ずと言っていいほどバスケットコートが設けられていたが、普段子供が屋外で遊ぶ様子をあまり目にしたことが無かった。保護員の方曰く、中国では学生はバスケットに親しむ機会が多いようだ。

1 保護員になるには、①村の選挙で2/3以上の票を集めること②保護局の行う選抜テスト(面接)に受かるという条件が課せられるが、保護員は個人主義無な場合も多く、森の事よりも自分のことを優先させることも少なくないという。保護員の中には小学校が最終学歴という物も少なくなく、地図などの字が読めない場合には、中学校卒業の経理担当スタッフに解読を求めるという。この村では「中学卒業」が高学歴のステータスのようになっていた。保護員の教育が充実されるべきであるという印象を受けた。しかし、小学校卒業であっても生まれた場所に土地があり、働き口があるのなら、無理をして勉学にはげむことも無いのかもしれない。都市では受験戦争に熱を上げる国民が増える一方で、山間部ではあまり気にしないという様子が見て取れた。また、保護員という職に就いても、理想と現実の乖離で辞めてしまう者も少なくない。

2.1.6 壮年男性Fのケース

彼の村ではゴムの栽培が主な収入減となっているということであった。この仕事は小学生の子供も手伝うというのだが、教育は行われているという。しかし、大学に通う者はまだいない。小学校は近くにあるが、中学高校は、少し離れた場所にあり、寮に入ることが多いそうだ。義務教育は9年間であるが、子供たちの中では町へは行きたくないという意見が多いようだ。その理由としては制限が多いからということだ。ちなみにこの村では小学生でも携帯電話を持っている率が増えている。

2.2 フィールドワークから

ここからは、現地で出会った方々の生活の様子を簡単に記述する。

●タバコ

インタビュー中には、村の方々がタバコをひっきりなしに吸う様子が見られた。ほとんどの男性がタバコを持っており、煙の行く先を気にすることもなかった。そして私たちにも、必ずと言っていいほど彼らはタバコを勧めるが、決して女性には渡さなかった。タバコは男性のもの、という価値観が浸透している印象を受けた(写真2)。



写真2:現地のタバコ

●迷彩服

インタビューをする中で、複数の村において迷彩柄の服を好んで着る男性が多くみられた。保護員の制服は迷彩柄なのだが、どうやら一般人男性の間でも人気の柄であるらしい。保護員に迷彩服着用の義務はないが、仕事をしていなくても迷彩柄の服を着ることはプライドに関わることだという。

●昼から麻雀

上大安村では、各家庭の玄関付近に麻雀テーブルが置かれていた。昼間から麻雀に興じる村人が多数見受けられた。

●見栄張り文化

立派な赤い車を家の下の駐車場に止めている家があった。車はほぼ新品で輝いていたので、使用機会は少ないのかを尋ねたところ、実は購入してもその後使わないことが多いという。車の所有が一種のステータスのようなものになっており、「隣の家が持っているのに、うちの家は無いのは恥ずかしい」という感覚になるのだという。

●服

衣服は以前は自分たちで作っており、夏冬兼用のスタイルだったので1年間で1着をずっと着まわしていたそうだ。現在は老人以外は曼興良(郷の中心部)で購入しているそうだ。

●フェスティバル

曼興良には火の祭りなどもあり、新年には春節(ラフ語でコーチャー)もある。この祭りではヌーというダンスを5日間、朝から晩まで踊り続けるそうだ。前半2日間は感謝の気持ちを表すもので、後半3日間は願いを込めてのダンスであるという。足を跳ねさせて踊るようなのだが、初心者にとっては難しいものであった。通常は、人々は円を描くように並び、豚の頭をその中心に飾りそして踊り始める。「ノームー」と呼ばれる笛を吹く人も登場するという。他にも祭りでは牛を殺すこともあるという。

●日本の知名度

日本についての印象を尋ねたところ、回答はゼロであった。TVもラジオもあるなかで、日本の事があまり知られていないのは少し意外であった。ちなみにTVの普及率はラフ族の村で60%であるようだ。

3. 考察

インタビューから浮かび上がったそれぞれの年齢層の特徴を以下に挙げる。

●高齢者層の現状

まず高齢者においては、識字率、特に中国語を読める人口率

が高いとは言えない状況である。このことによってもたらされる問題点は、仕事に就きにくいということ、また、TVや新聞などの発する情報を正しく受け取ることが出来ないということなどである。また、自らの生まれた村で過ごした年数が長いせいか、村や自民族への愛着が比較的高いように感じられた。

●若者の現状

若者は、村に対する所属意識がありながらも、村の外に出ていく事にもあまり抵抗を持っていないように感じられた。また、現在の教育では、彼ら独自の言語がだんだんと話されなくなってきており、そのことによって、伝統文化が消失してしまう恐れがあるとも感じられた。村以外の社会に対する関心があまりないという若者の姿もある。このことによって、無意識のうちに自らの依拠する自然破壊に加担してしまう恐れがある。また、社会の仕組みを理解しないことにより、搾取の対象になり得るという状況も実際に起こっている。

また、若者は高齢者に比べて流動化が進んでいると言える。場所の移動も簡単になり、情報も得られやすい中で、個々人が自らのアイデンティティを選択する自由が広がった中で、複数の所属を選ぶことも可能となっている。住居を例にとると、以前は一家族が一部屋で生活していたのに対し、現在は、一人につき一部屋を与えられることも多いという(実際にインタビュー協力者である若年女性Bさんは、一人部屋を持っていた)。その中で、個人の概念も変化し、そのことで婚姻の形も変容した。今では多民族の村も増えていると考えられる。

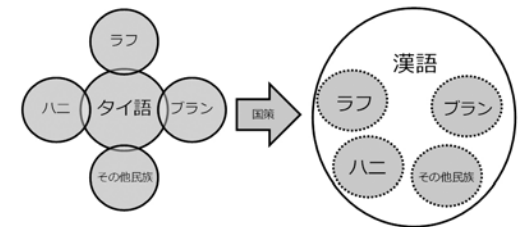
従来はブラン族、ラフ族などが、寺院²で教えられたタイ語も一部使用するという形をとっていたが、社会主義化以降、そのような文化はなくなり、学校教育によって、漢語が教えられることとなる。また、マスメディアの影響などもあり、各民族の使用言語も変化し、彼ら自身の人生も変化することとなった。

今回の調査地における現在の大学への進学率は、ほぼ0%である。その理由として考えられるのは、物理的距離が遠いということ、そしてもうひとつは、大学でメジャーとされている文化に、納板保護区の若者がついて行けないということが考えられる。大

2 タイでは男児が7歳を迎えると寺院で修業をするという風習があった。

学での教育は大半が漢語で行われているが、彼ら自身の母語で教育しないということが、かれらにとってのハンディになっていることは見逃せることではない。漢化政策の中で見過ごされてきた問題が、ここにあると言える。

今回の調査から得られた漢化における知見を図示すると、以下のようになる。



また、漢化とともに、個人化による生活様式や個々人の意識の変化も起こり、それによって人間やものの流動化も進んできた。そしてそれらの変化は年齢層の違いによって特に大きく見られた。

納板保護区の特徴は、冒頭にも示した通り、特殊な環境による自然の多様性と、それによって培われた多様な文化が存在することである。類稀なこの色とりどりの自然文化環境が一元化に向かうことで様々な問題が生じると考えられる。この自然環境と人間とが融合してきた状況から、我々が学べることは多いのではないだろうか。

参考文献

- トンチャイ・ウィニツチャクン
2003 『地図がつくったタイ——国民国家誕生の歴史』石井米雄訳、明石書店。
スチュアート・ホール
1998 「ニュー・エスニシティズ」大熊高明訳、『現代思想』26:4。
毛里和子
1998 『周縁からの中国——民族と国家』東京大学出版会。
梶丸岳
2008 「民族アイデンティティ」からエイジェンシーへ：中国貴州省ブイ族を事例に」『中国研究月報』62(7)、1-12頁。

黄光学

1995 『当代中国的民族工作』当代中国出版社、67 頁。

李鉄哲

2007 「グローバル化時代の朝鮮族社会構図」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所。

鈴木正崇

1993 「創られた民族——中国の少数民族と国家形成」飯島茂編『せめぎあう「民族」と国家 人類学的視座から』アカデミア出版会、211-238頁。

新谷忠彦編

1984 『(アジア文化叢書) 黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社。

蘇于君

2011 「中国における農村教育の発展とその課題」『鶴山論叢』11、1-21頁。

中村則弘

1993 「中国の社会変動と少数民族アイデンティティ」『帯広畜産大学学術研究報告 人文社会科学論集』8(4)、293-309頁。